

## 2008年2月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

ユーラシア大陸では、1月に引き続きシベリア高気圧の勢力がかなり強かった。このため中国北部から華南、ベトナム付近にかけて顕著な低温となった。北太平洋東部では、1月に引き続いてリッジの発達が見られ、寒帯前線ジェットの前線が明瞭だった。高周波擾乱の活動は、北太平洋のストームトラック域では、1月に引き続き、北太平洋東部の寒帯前線ジェットの前線に対応して、北太平洋東部で平年よりも極寄りに位置し、全般にかなり活発だった。また北大西洋でも平年よりもかなり活発だったが、北大西洋中央部からグリーンランドやアフリカ西岸にかけて、活発域の南北の分離が明瞭に見られた。

熱帯の対流活動は、インドネシアや南シナ海、フィリピン付近でかなり活発だったほか、インド洋赤道域でも活発だった。メラネシア付近でも活発で、SPCZは平年に比べ西偏していた。西・中部太平洋ではかなり不活発だった。赤道季節内振動(MJO)の東進は、上旬から中旬までは明瞭で、対流活発な位相がインド洋から大西洋へと到達したが、下旬になると東進は不明瞭になった。インドネシア付近は、活発位相が通過した後も対流活発な状態が続いた。対流活動の偏差分布に対応して、対流圏上層では、中東から東アジアにかけて高気圧性循環偏差、中部太平洋では赤道を挟ん

だ低気圧性循環偏差の対が見られた。対流圏下層では、インド洋からインドネシア付近にかけて赤道を挟んだ低気圧性循環偏差の対、西・中部太平洋では高気圧性循環偏差の対が見られた。

南方振動指数(SOI)は+1.8となった。

### 世界の天候

2008年2月の世界の月平均地上気温平年差は、+0.04°Cだった。世界の2月平均地上気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は0.76°C/100年である。

○発達したシベリア高気圧の影響により、中国からアジア南部の広い範囲で異常低温となった。

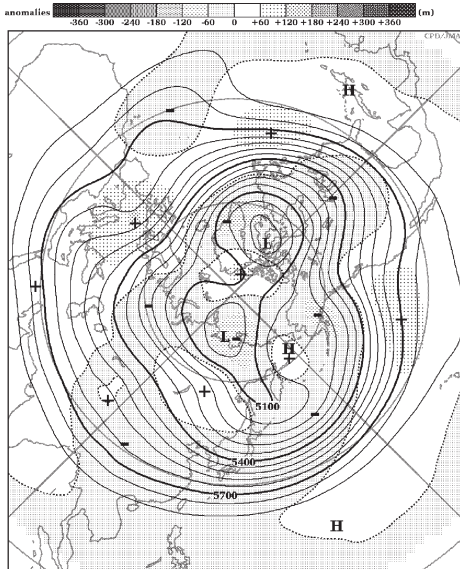
○低気圧の活動が平年より活発で、中央シベリア～ロシア西部では異常多雨となった。

○ラニーニャ現象と熱帯の季節内変動の影響により、東南アジア周辺からオーストラリア北東部で異常多雨となった。

(気象庁地球環境・海洋部気候情報課)

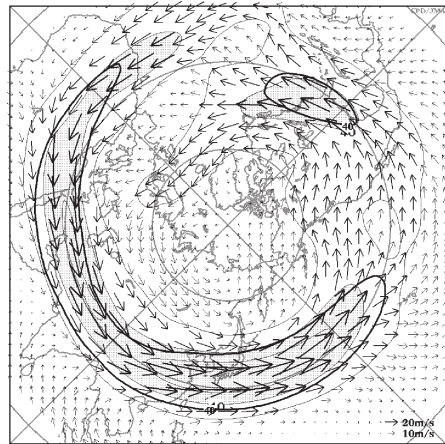
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



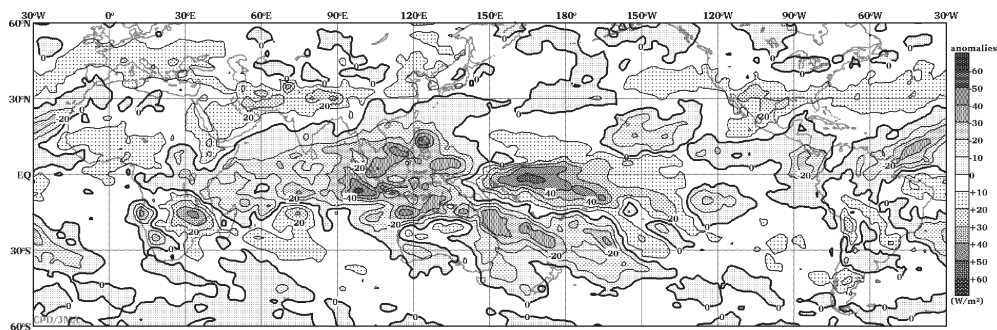
2008年2月の北半球月平均500 hPa高度および平年偏差

等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1979～2004年のデータから作成。

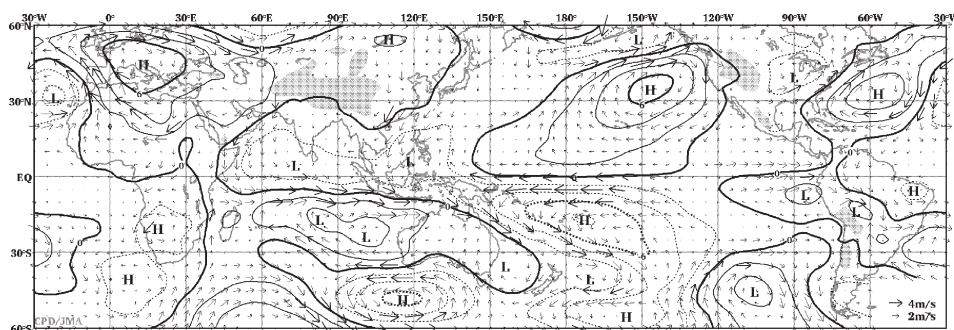


2008年2月の北半球月平均200 hPa風速および風ベクトル

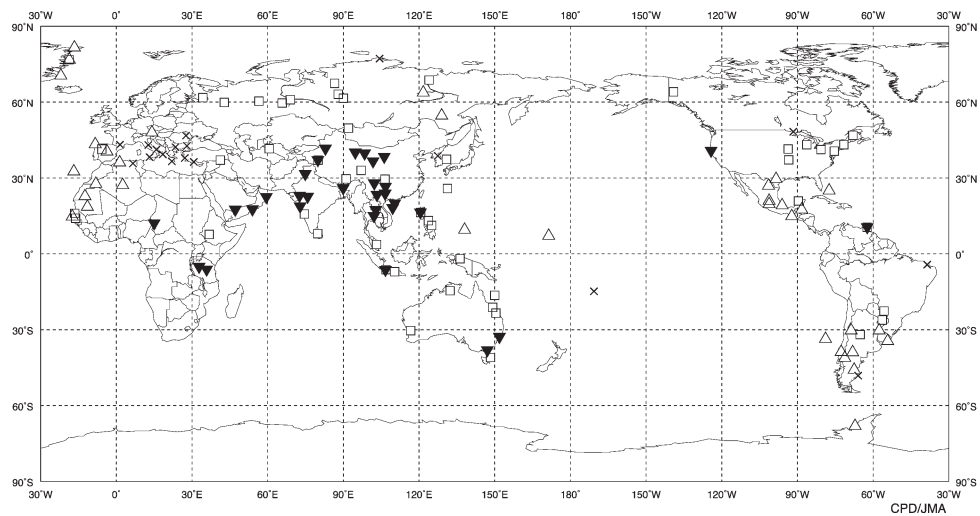
等値線間隔は20 m/s。陰影部は40 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1979～2004年のデータから作成。



2008年2月の月平均外向き長波放射量年偏差  
 等値線間隔は  $10 \text{ W/m}^2$  で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは NOAA。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2008年2月の月平均850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル  
 流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2008年2月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上，異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。